

「パンドラの牢獄」

作詞・作曲：奏音 69 編曲：田熊知存

赤：木暮 青：馬場 橙：折原 緑：有隅 紫：組み合わせ 黒：全員

歴史を変えるのはいつも、誰かが言ったひとつの【言葉】。
世界が夜になるはじまりは、この最悪の物語[ダーケストーリー]。

少年[サウロ]は途方に暮れた。
今日もあいつらに虐められてしまったのだ。
「早く帰りたい……」
サウロは泣きながら、誰もいない牢獄を磨き続けた――。

華麗なこの街[ダルカ]に、僕の居場所はどこにもない。
【言葉】を交わす友達もいない。
ひとり逃げ出そうにも、僕にはそんな勇気もない。
お願い、誰か僕を見つけてくれよ。

見知らぬ地下牢……呼び声がこだまする。
「そこにいるの……？」
誰なのか知りたい。その姿を見たい。
魅せられたサウロは、もう引き返せない。

麗しく澄んだ青い眼。穢れを知らぬ黎[くろ]い髪。
天使が僕に微笑みかける。
「私が、願いを叶えてあげる」
彼には初めてのこと。誰かと【言葉】を交わすのは。
世界を塗り潰すはじまりは、小さな恋でした。

その天使、イリスはひとりぼっちだった。
なぜこんな地下牢にいるのか、それはどうだっていい。
孤独なサウロにとって、イリスは唯一の理解者なのだ。
そして彼は、夜ごとその牢獄を訪れる。

僕のどんな願いも、不思議と叶えてくれる。
彼女は、(有隅・折原) きっと本当に天使なんだろう

なのに、あいつら。

僕に悪魔が憑いてると蹴りつけた。

「違う……！」

僕にとってむしろ【言葉】を聞きもせず、

嘲笑うお前らが悪魔に見える……！

傷だらけのその心。涙に濡れるその両手が、

禁じられた牢獄を開けてしまう。

「ここから、ふたりで逃げ出そうよ」

彼には初めてのこと。愛で何も見えなくなるのは。

世界は僕にとっての牢獄だ。壊れてしまえばいい。

姿形[すがた]の違う者たちが、恋愛[あい]し合うのは難しい。(有隅・折原)

午前0時。約束の時間に、イリスは現れなかった。

異変に気付いたのは、その時。

街[ダルカ]から惨憺たる声が聞こえてくるのだ。(有隅・折原)

暗闇に震える心を押して、サウロは街の方角へ走った。(馬場・木暮)

本当は分かっている。自分が一体何を解き放ってしまったのか。

それでもサウロは、あの天使を――

【言葉】を、信じていたかった。

やっと会えた。ねえ顔を見せて。天使のように微笑んで。

「……イリス？」

いや……その姿、もう彼女ではない。

あぁまさか。月が照らす、天使の素顔。

君は――

「夜の悪魔[ヴァンヒール]……！」

それは、悍ましい紅い眼。ああ、血に飢えた皓[しろ]い牙。

悪魔が僕に微笑みかける。

君だけを愛してたのに、イリス……！

……本当に愛しているわ、サウロ。だから世界を壊してあげるわ。

ただ、あなたには私の愛の手段[かたち]が、“悪意”に映[みえ]るだけ。

悪魔の女が愛を交配[かわ]す手段は、ただひとつ。
心から愛した男を、喰い殺す事である。

牢獄を開けて放たれたのは、まさしく”悪意[あい]”でした。

一夜にして、首都ダルカは堕ちた。
たったひとりの悪魔の【言葉】によって。
かの王国ミストラは、これから 50 年余り続く悪魔の支配——
"黒い時代"を迎えるのである。

やがてイリスは、ひとりの男の子を産む。
愛する我が子に”悪意”という皮肉を込めて、
"マリス[Malice]"と名付けた。